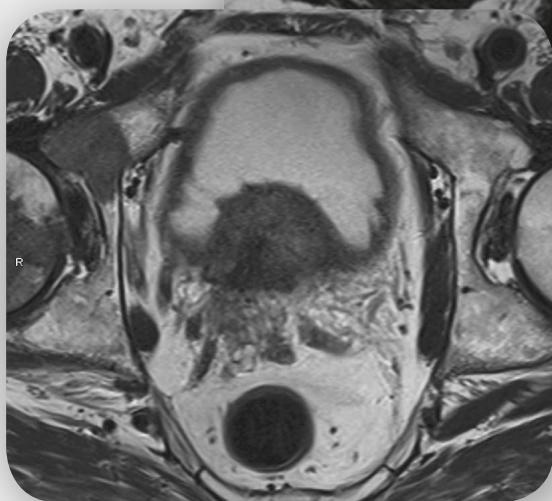
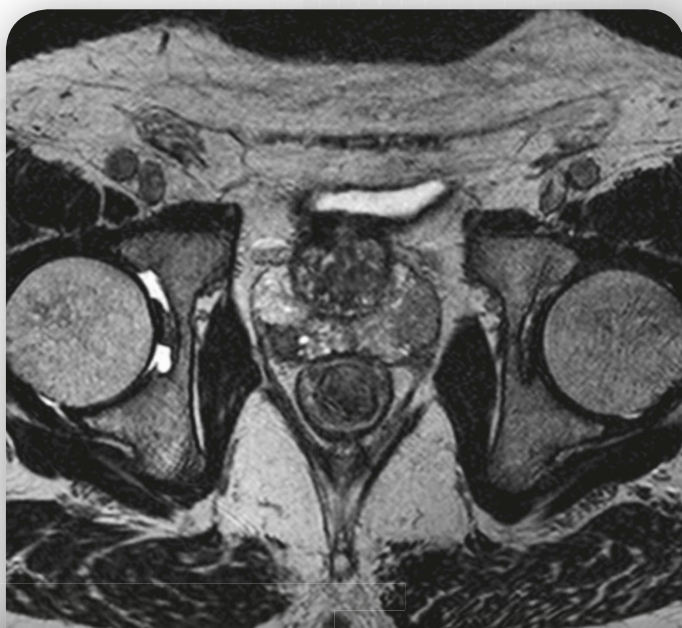


特 集

前立腺癌の画像



(写真：p. 512, 527より)

診断 update

序説

現在、わが国において男性の癌罹患数の上位に位置し、年間約9万人の症例が発生する前立腺癌は、根治療法の適応となる臨床的な有意癌と、PSA監視療法を主体とした保存的療法の適応となる非有意癌に分類される。有意癌か非有意癌かの判定には、腫瘍検出/局在、悪性度の評価、病期診断、再発診断や病巣部の生検のすべてにおいて高い精度が求められ、前立腺癌診療における画像診断の役割はますます高くなっている。

前立腺局所の画像診断においては、形態画像に機能画像を加えたマルチパラメトリックMRI(multiparametric MRI; mpMRI)の位置付けが高く、撮像法、評価法やレポーティングの標準化を示した診断基準(Prostate Imaging Reporting and Data System; PI-RADS)が利用されるようになり、さらにMRIの画像情報をガイドとした標的生検の臨床応用も開始されている。

また各種の温存術を含めたロボット支援前立腺全摘除術における術前mpMRIの有用性も、画像評価の際に大切なポイントとなる。一方、mpMRIの限界やほかの画像診断モダリティの動向についての理解も重要であるとともに、近年話題となっている人工知能の画像評価への活用の可能性についても興味をもたれるところである。

本特集では、前立腺癌の画像診断に精通した放射線科医および病理診断医、また画像診断を利用した前立腺癌症例のマネジメントにおいてわが国を代表する泌尿器科医に、上記の内容についてそれぞれわかりやすく解説をいただき、コンパクトではあるものの前立腺癌の画像診断の現状から将来展望を網羅的に把握することができる内容となっている。

本特集が前立腺癌の画像診断にかかわるすべての方々の日常診療に役立ち、今後の前立腺癌診療に貢献するための臨床研究において、大きなヒントを与えることができれば幸いである。

最後に、ご多忙の折、快く執筆を承諾いただいた先生方に深く感謝申し上げます。

玉田 勉